

発達障害児のファミリーケースワーク

—— 家族療法的アプローチ ——

The family casework of developmental disorders

—Family therapeutic approach—

安 田 勉

Tsutomu Yasuda

1. 問 題

障害児に対する療育活動は、基本的には、障害を持つ子供の発達を保障する過程として行われる。具体的には、障害そのものに焦点を当て、障害を軽減し、発達を促すための援助過程として取り組まれる。その場合、家族に対して前向きに子育てや療育をしていけるような展望や考え方を提示していくことが重要である。

さて、そのような援助過程の中で特に問題となってくるのが、障害児の発達基盤としての養育環境の問題、特に、主要な発達基盤である家族の問題である。すなわち、親、特に、母親が障害児の関わりにすべてをかけてしまうあまり、家族全体の問題、家族構成員間の関係やそれぞれの活動が忘れがちとなり、各家族構成員の間に軋轢が生まれ、結果として、発達基盤としての養育環境を歪めることになる（例えば、他の子供の情緒的な問題が生まれたり、時には、離婚したりする場合がある）。そのために、障害児に二次的な問題としての情緒的な障害を付加し、一次障害としての発達障害に対する療育を困難にしていくという結果となる。そして、うまく療育できない→家族構成員間の軋轢→情緒的な障害の付加→うまく療育できない、という悪循環を生む。従って、障害児の療育を考える場合、上述の悪循環を生ないということが重要となってくる。

そのためには、障害児を周りの環境からきり離して考えるのではなく、「そのおかれている社会的状況の中で把握しようとする」¹⁾ 家族療法からの視点が必要であるように考えられる。家族療法は精神病理に対するアプローチの一つとして発展してきたものであるが、その理論と方法は、障害児療育にも応用できるものである。そこで、本論文では、主要な発達基盤としての家族の機能的結合を視点にした発達障害児の療育過程を報告する。

2. 症 例

受付時（1982年3月）4歳8カ月の女児。主訴は言葉の遅れがあり、対人関係がうまくもてないことである。

<生育歴>

第二子として出生。正常分娩で3,700グラムである。身体的側面の発達では、首のすわりが3カ月、這うことが11カ月、つかまり立ちが1歳4カ月、始歩が1歳6カ月である。また、言語・社会的側面では、4～5カ月にはあやすと笑うということが見られた。初語が10カ月（パパ、ママ、ブーブー）、二語文が1歳9カ月（おかあちゃんおやすみなさい）である。身辺の自立に関しては、おむつを外したのが1歳9カ月、衣服の着脱が2歳6カ月である。離乳は1歳である。

両親稼働のために、生後3カ月から家庭保育室に通い、1歳9カ月から保育園に通う。2歳6カ月ごろに、他児に比べて言葉や動きが少ないことや高いところを恐がったり、水の音やエンジンの音を恐がるというようなことが見られるようになった。そして、3歳前後に言葉を話さなくなった。また、トイレトペーパーを破いてはトイレに捨てたり、水道の蛇口を繰り返すということが見られた。尚、1歳6カ月検診では何も言われなかった。

<いままでに相談した機関>

市立病院では、脳に外傷があり、また脳波異常が見られるとのことで1981年7月より投薬の指示。心身障害児センターでは、母親の関わりを多くすることと保母にしっかり関わってもらうよう指示される。ヒアリングセンターでは、耳の聞こえには問題はないので、ごっこ遊びや声がけをするように指示される。ことばの教室と障害児通園施設には現在通っており、発声が見られたり、行動が活発になってきている。

<発達検査>

使用検査：新版K式発達検査

検 査 日：1982年4月16日（4歳9カ月）

発達指数：全領域 52.6（発達年齢2：6）

全般的に遅れが見られるが、特に、認知・適応領域では2：3～2：6の課題から達成ができなくなる。

＜家族構造＞

両親、兄、本児の4人家族である。まず、両親の関係についてであるが、子供達の養育に関して一致度は高い。しかし、父親が物静かな人のため、動きが母親に理解されない時がある。父と兄、母と兄の関係も互いに発言を傾聴し合い、良好である。本児と兄の関係も友好的態度が見られ、良好であり、どちらかという、兄は本児に対する物わकारの良さがあり、自己の欲求を表現しないところがある。全体として、うまく機能している。

3. 療育過程

療育期間は、3年2カ月で、71セッションを行った。基本的には、週1回、土曜日に1時間30分の予定で行った。途中、長期休業（夏、冬、春休み）のため、1カ月から2カ月のブランクがあった。

次に、療育過程について、療育目標の相違からⅢ期に分けて述べる。

第Ⅰ期は、家族関係に注意しながら、本児に対する働きかけを中心とし、本児が発達することを母親に示し、家族に対して安心感を作ることを目標とした。第Ⅱ期は、父親に対する母親の不満を契機として、父親を本児の療育に参加できるようにし、両親間のより率直なコミュニケーションを形成することを目標とした。第Ⅲ期は、本児の小学校への入学、家族の転居等の家族の変化に対し、家族がうまく対応できるようにし、家族構成員間の機能を安定させることを目標とした。また、セッション（以下、Sと略す）の進め方としては、以下の項目を中心に行なった。まず、母親から①本児の家での様子②保育園での様子③他の療育機関での様子④父親、兄の動き⑤現在、困っていること（母親自身のことも含めて）等について聞き、次に、⑥本児の動きに合わせて課題を行う⑦家での課題や家族にして欲しいこと等話し合うことである。尚、各期におけるセッション数、父親の参加回数、兄の参加回数は表1の通りである。

第Ⅰ期〔1982年3月（初回）より1983年3月（29回）まで〕

初回面接および2回目でインテイク、3回目で発達検査を行なった。本児の状況としては、①多動ではな

表1 各期におけるセッション数、父親の参加回数、兄の参加回数

段 階	セッション数	父親の参加回数	兄の参加回数
第Ⅰ期	29	4	6
第Ⅱ期	25	9	4
第Ⅲ期	17	4	1

い②視線は合う（保育園では合わない）③言葉は単語を話すことができる④言葉のやりとりでは反響言語がある⑤母親といると発語も多く、動きも活発⑥他児の模倣行為が多い⑦動くことと絵を書くことが多い、が挙げられる。尚、発達検査については上述の通りである。以上から、他児と遊びながら、模倣行為を広げることと粗大運動をすることを当面の目標として、療育を開始した。母親にも遊びの中に入れてもらった。尚、父親のセッションへの参加は、表1のように2～4カ月に一度で、計4回である。

本児はトランポリン、ブランコ、回転ブランコ、滑り台が好きで、これらをしながら他児の行為を模倣する（自発的行為）ことが多い。S7から絵を書くことを始めた。その絵は図1～S7、図2～S9のようになぐり書きである。S8で、家での会話量が増え、保育園でも視線が合うようになってきたとの報告があった。母親からは、S6で「私の方が気持ちが休まりました」、S10で「気持ちが落ち着いた。良い方向に向かうことが確信できました」という発言が聞かれた。

夏休み明けのS12で、保育園への不適応についての相談があった。保育園に行くと「家に帰る」と言ったり、食事を取らず、捨てたりするとのことである。この相談は、本児に否定的変化が見られたことと家やセッション中では少しずつ変化が見られるのに保育園ではそれほどではないという思いがあったことが相談の一因として挙げられるだろう。そこで、何がそうさせているか調べてみることを提案する。その結果、S13では、他の園児が「おし、おし」と言ってからかったり、保母は本児をほって置くことが多いとのことが出てきた。そこで、すぐに、保育園での様子を観察することと働きかけについての相談をするため保育園への訪問を申し入れ、実施した。保育園では、保母が声がけすると動くが、課題を行う時や集団遊びでは一人であった。また、保母の話では、動きが悪くなってきたのは夏休み以降で、他の園児のいじめがあったのではないかとのこと。そして、本児が声がけに対して反応しないことがあり、そのことを保母は無視されたと理解し、本児に対する否定的感情を持っていた。そこで、

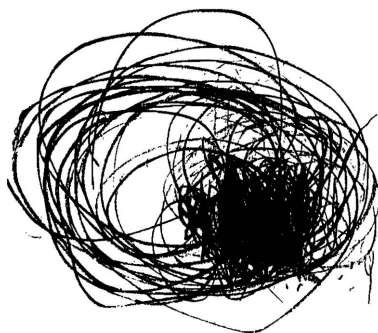


図1 1982年6月12日（第7回）

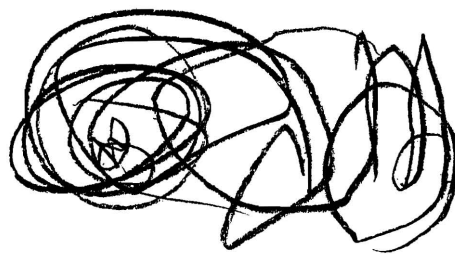


図2 1982年7月3日（第9回）

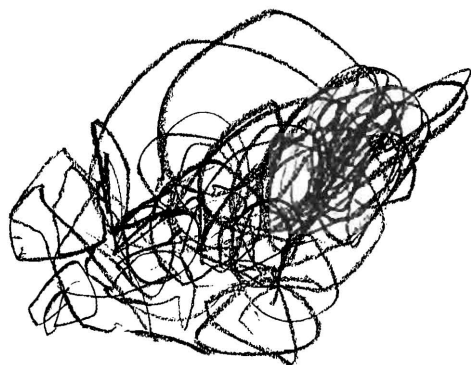


図3 1982年12月4日（第23回）



図4 1983年1月22日（第25回）

本児の状況を説明すると共に働きかけに対する願いをした。

その後も、母親が保母から「…ができない」と言われることがあり、その都度、「やってみせるとできることが多いので、やって見せるように保母にお願いして下さい」と母親に指示。S26で、保母の手伝いをしたり、活動的になってきたとの報告あり。S27では、みんなの所に行くようになった。言われなくてもするようになった。子供達の間では模倣が見られたり、発語が見られるようになったとの報告があった。保母の働きかけが本児の変化を生み、それが保母の肯定的評価を生むという良循環が形成された。

言葉については、S16あたりから、大きな声で歌ったり、話したりすることが見られ、よその家に行っても声が大きくなったと言われた。S23では「これは？これは？」とか「…してちょうだい」が多くなり、話のやり取りも会話らしくなってきた。また自己中心語

とも思える、一人でブツブツ言いながら遊ぶことが見られた。

また、それに合わせるように絵を書くことが多くなり、なぐり書きから（図3-S23）から形あるもの、特に人間の絵を書くことが多く見られるようになった（図4、図5、図6-S25、図7-S26、図8、図9-S27、図10-S28）。それぞれテーマはないが、両親及び兄の関わりの良さを理解することができる。

家族については、S28で、本児の発語がなくなったこととの関わりで、母親自身の生い立ちや出生家族に起きた問題、父親についての評価の話が出された。

そのことから、父親の積極的な参加により、家族の活性化を図ることの必要性を感じた。S29が3月末で、その後長期休業に入ることから、S30から父親の参加によるセッションを行うこととした。

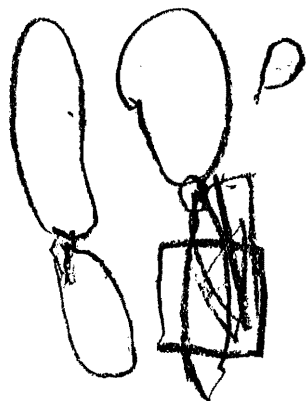


図 5 1983年 1 月22日 (第25回)

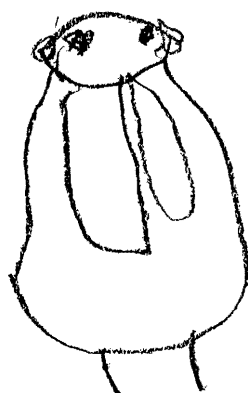


図 6 1983年 1 月22日 (第25回)

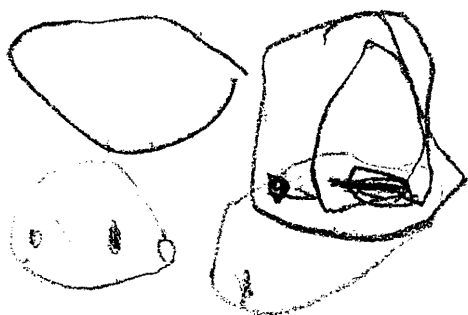


図 7 丸 (左) と四角 (右)
1983年 1 月29日 (第26回)



図 8 1983年 2 月19日 (第27回)

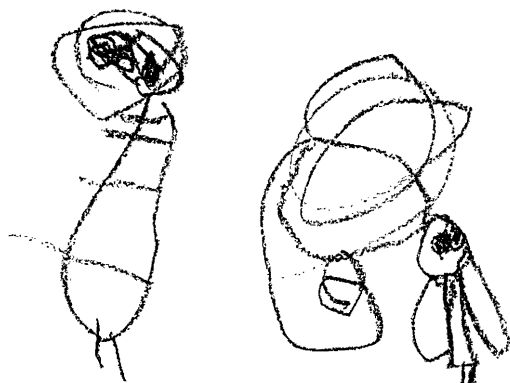


図 9 1983年 2 月19日 (第27回)



図10 自分
1983年 3 月12日 (第28回)

第II期〔1983年5月(30回)より1984年3月(54回)まで〕

2カ月の休みの後、1983年5月よりセッションを開始した。特に5月、6月に集中して父親の参加を求めた。この期の目標としては、父親を本児の療育に参加できるようにし、両親間のより率直なコミュニケーションを形成すること、そして、本児に対しては、粗大運動を中心にしながら微細運動の発達を促すことと言葉の数増やすことを目標とした。

S30では、両親と本児が来所した。最初、父親はセッションに入ろうとせず、セラピストの促しによってやっと入る。本児の家での様子としては、会話は日常、困らない程度にできるようになった。例えば、日誌に書かれていたことであるが、デパートでの母親との会話として次のような会話があった。母親：「A(本児)ちゃんどこへ行くの？」本児：「食堂」母親：「食堂へ行って何を食べるの？」本児：「お子様ランチ」

そして、好きな子供には、自分から手を引っ張ったりして関わられるようになった。困っていることとしては、買物に行くといなくなってしまうことであった。また、朝、1時間くらいの散歩を始めた(「父親がやってくれないので」と付け加える)。

次に、父親に本児の様子を聞いたところ、「あまり変わっていない」と本児の変化に対する評価は低い。このことが、セッションに入りたがらないという行動に現れたものと考えられる。またその行動は、自分がそれなりにやっているのに、本児の療育から排除されていることに対する攻撃の現れとも理解できる。

そこで、父親に対する母親の評価を高めること父親自身に本児の療育に参加していることの再確認のために、母親に理解されやすい関わり行動として、寝る前に本児に絵本を読むことを提案した。父親はそのことを了解した。

S32で、父親が本児に絵本を読んでやる時に、母親も一緒にいるということが生まれてきた。また、「父親は余り話をしないが、お酒を飲むと楽しくなる。2人で話をしていると自分が話してしまう」という発言があった。そこで、母親に、子供達が寝てから、一緒にお酒を飲んだりまた聞き役に回ることを提案した。

S35からは、父親に対する不満はなくなり、肯定的評価が多くなった。その結果、母親の心理的負担は軽減した。また、夫の呼び方も以前までは姓を言っていたが、S53では、「主人」という言い方に変わってきた。

父親は絵本読みを継続しており、朝の散歩もするようになり(S33)、保育園からの迎えもするようになった



図11 自分(左)と母親(右)
1984年1月14日(第47回)

た(S41)。療育へ積極的に参加している様子が伺える。

その結果、本児にも様々な効果が現れた。例えば、母親と一緒になくてはだめということがなくなり、母子分離ができた(S40)。近くの友達の呼んで遊んだり、友達の家に行ったりする(S39)等である。また、セッション中においても変化が見られた。反応時間が短くなり、場面の転換も早くできる様になった(S39)。そして、本児の絵にも、本児の変化や家族の関わりを反映していると考えられるものが、はっきりしたテーマで書かれる様になった。S47では自分と母親(図11)、兄(図12)、父親(図13)、S48では、父親(図14)、兄(図15)、S52では、母親(図16)、兄(図17)が書かれている。

また、この期の中心的な相談の一つとしては、就学の問題があった。具体的には、普通学級に通わせるか、または、いわゆる特殊学級に通わせるかということである。経過としては次のようである。心身障害者センターに行ったところ、「どちらでも良いが、特殊学級に入れた方がよい」と言われた。どうしたら良いのかという相談である。両親の意見は「普通学級に通わせたい」とのことなので、そうするように勧めた。両親は、その後、様々な人に相談したようであるが、従来の考え通り進め、3月に学校の近くに転居し、本児の就学の準備を完了した。

第III期〔1984年4月(55回)より1985年5月(71回)まで〕

1カ月半の休みの後、セッション(S55—4月21日)を再開した。入学後の本児および家族の安定を図ることを目的として、2週間に1度の割合でセッションを行った。父親には、5月および6月に月1回ずつ参加



図12 兄
1984年1月14日（第47回）



図13 父親
1984年1月14日（第47回）



図14 父親
1984年1月21日（第48回）

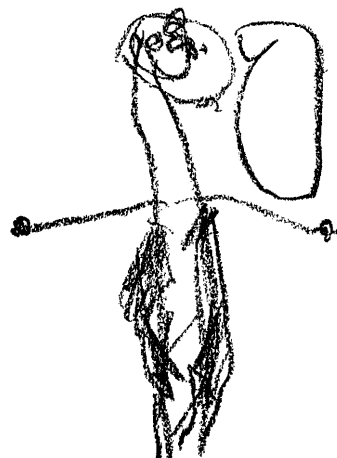


図15 兄
1984年1月21日（第48回）



図16 母親
1984年2月25日（第52回）



図17 兄
1984年2月25日（第52回）

してもらった（その他に2回の参加ありー9月と12月）。

学校およびクラスでの受け入れも良く、また、本児も他児と良く遊び、授業中も少し席を立つ程度の状況であり、楽しく学校に通った（S56, S57）。学習については、遅れがちであるが、他児に教えられて、数や文字に興味を持ち、学習するようになった（S59, S60）。

また、母親への愛着行動が強まった（S55, S59）。このことは、状況の変化による自己の不安を母親に依存することで解消しようとしているように考えられる。2学期になって、12月にてんかん発作のため2週間の入院があった。その後、しばらくよだれをたらすことが続いたが、投薬の調整の結果なくなり、順調に過ごした。

言葉については、場面にあった会話ができ、自分のいやなことの理由も言えるようになる（S62, S66）。2学期終了時の通知表には、「オーム返しも無くなりしっかり答えられるようになった」と記されていた。

S68で、母親は本児について「一生懸命が、余裕をもって見れるようになりました」と話してくれた。

家族の問題では、S70（3月16日）で、兄がクラブ活動で上級生からいじめられ、暴力を振るわれるという相談があった。母親は、怪我をしてることが多くなり、兄に聞いたところ、夏休み以降からあったことをやっと話してくれ、そのことがわかった。セラピストは父に相談することを勧め、具体的な指示はしなかった。翌日に相談し、その結果、父が中心となって、兄の問題を解決した。

本児が2年生になってからのS71では、担任が変わったこと、母親がクラス役員になったことが報告された。母親の話および本児の行動から、家族の機能性が維持されていると判断し、全セッションを終了した。

4. 考 察

＜ファミリーケースワーク、家族療法的アプローチについて＞

本症例は、発達障害児のファミリーケースワークを家族療法的アプローチと題して報告したが、ファミリーケースワークと家族療法はどの様に異なるのだろうか。ファミリーケースワークは「『個々人の行動に注目し』、『個々の家族成員の内面的変化を手助けする手段として家族を道具的に扱います』。家族療法の場合は「家族全体のシステムに注目し、システム＜全体＞を変え関わりを目指します」2）。すなわち、ファミリーケースワークは、全体としての家族が部分としての

家族構成員を一方的に規定するものとして考え、さらに個々の家族構成員間の関係を重視していない。また、療育の過程で起きてくる家族内の変化を配慮していないように考えられる。しかし、家族は家族構成員としての個人を一方的に規定するものでもなければ、また個人によって規定されるものでもなく、相補的に規定し合うものであり、家族構成員間の関係によって変化するのである。家族療法、特に、構造学派はシステム全体と部分は部分間の関係を通してのみ適切に説明できるという考えを前提に、家族病理はその家族が非機能的であることによって発生するのであり、その治療は家族を機能的にすることであると考える。

従って、本症例では「家族構成員間の関係や家族全体の機能性を配慮し、維持しながら」(病理を生まない)ということで「家族療法的」という言葉を使った。すなわち、「家族療法的アプローチとしてのファミリーケースワーク」とは、家族構成員間の関係や家族全体の機能性を配慮し、維持しながら、同時に、本児への援助のために家族を道具として活用して行くということである。

このようなアプローチによって、親、特に母親が障害児との関わりにすべてをかけてしまうという偏りも、また、そのことによって、他の子供が疎外感を持つということも避けることができ、さらには、家族の重要な位置を占める父親が療育から逃避することなく積極的に参加してもらえることになると考えられる。

＜機能的家族について＞

次に、上述した家族療法における家族の機能性とは何かということについて考えてみたい。家族療法における機能性とは家族システムが移り変わる環境に対して適応的か否かということである。家族が機能的であるということについては、様々な要因が絡み合い一次元で述べることでできないだろう。J. M. Lewis 3)らの調査研究によれば、「もっともうまく機能している家族にだけ見られて、余り恵まれていない家族には欠けているような特性は一つも見いだされなかった。これに反して、最適に機能しているとか能力を備えた家族というのは、多くの変量の存在とそれらの相互関係によって区別しうるのである」と述べ、機能的家族にみられる諸特徴として次の項目を挙げている。①友好的態度を示すこと②主観的見解を尊重すること③動機は常に複雑であるという確信がある④高いレベルの能動性を示す⑤お互いに協力し合い、接近し、対話をし合うという両親連合がある⑥個々の自立性が高い⑦家族とは何かの認識の一致度が高い⑧コミュニケーションにおいて、互いに発言を傾聴し合い、感情が率直に伝

達され、暖かく、思いやりがある⑨周囲とのかかわり合いが活発である。

＜療育過程における家族関係について＞

本症例では、特に、⑤と⑧を中心的な特徴と考え療育を行った。第Ⅰ期においては、本児の発達を促すことに集中してしまうあまり、家族関係を配慮すると言いながら、今までそれぞれの家族構成員が本児に対してどの様な感情を持ち、そして現在の家族の有様に対してどの様な感情を持っているのかを理解することを軽視してしまい、父親および兄は母親と同様に本児に対してできることをしたいという意欲を持っていたにもかかわらず（第Ⅱ期における父親の動きや兄の関わり方を見れば明らかである）、結果として、父親と兄を療育場面から遠ざけることになってしまった。家族構成員の一人が集中的に関わるということは、結果として他の家族構成員を離れさせてしまうことになるということを理解しておくべきであった。

そして、そのことによって家族内に歪みが生むことになった（例えば、何もやってくれないという父親に対する不満と攻撃）。療育目標に段階論をとったことによって、不要な、母親の父親に対する不満と攻撃を生んだと言える。段階論ではなく、本児への働きかけと家族の機能性を高めることを同時平行的に行うべきであった。セラピスト自身の療育観の狭さの現れである。父親が積極的に参加してくれるようになってからの本児の変化は、めざましいものがあった。

また、本症例の場合はそのようなことはなかったが、障害児が生まれたことから、両親または一方が「この子は自分のこどもではない」との考えの基に障害児および家族に対する否定的感情を持ち、仕事に没頭したり、異性との関係ができたりと家族からの逃避や家族の崩壊につながる場合がある。意欲を理解するという積極的な意味だけではなくて、それぞれの家族構成員が本児に対してどの様な感情を持ち、そして現在の家族の有様に対してどの様な感情を持っているのかを十分理解することが必要である。もし、上述のような事が存在する場合、家族の崩壊を防ぐための介入は療育を進めていく上で重要な位置を占めることになる。

次に、障害児の兄弟の問題を考えてみたい。障害児の兄弟は、概して、兄弟としての障害児への関わりに積極的であり、物分かりが良く、親にとって良き協力者であり、いわゆる「よい子」が多い。そのため、見過ごされることがある。谷口 4)は『両親は、障害児を世話することで精一杯であったり、「この子のためにすべての時間と努力を費やしてあげよう」といった献身の構えに満ちているために、きょうだいが無視される

ことがあるのです。きょうだいのことなど考えてもいなかった両親からは、“障害”についての率直で正確な伝達がなにもなされていないので、きょうだいたちは他の子のあざけりに応えることもできないなど、“当惑”や“ふんまん”あるいは“恥ずかしさ”などの感情に埋もれていることがあるのです。障害をもつきょうだいのことを友達にどう話したらよいのか、自分のきょうだいはどれくらいの能力をもっているのか、両親は自分を無視しているが不公平ではないか…と様々な疑問や要求がきょうだいのなかにあるのです』と述べている。本児の兄も同様であったと言える。兄はクラブ活動の中で、上級生からいやがらせ、いじめや暴力を受けているにもかかわらず、両親に話せなかったのである。妹のことで、両親が精一杯であるのにこれ以上心配をかけられないという思いがそうさせたと考えられる。従って、障害児を持つ兄弟に対しては、その子に分かるように、障害について必要な範囲で率直に伝えるときともにコミュニケーションをとり、子どもの心の動きを知っていることが大切である。その意味では、本児の場合、段階論をとったことが、父親のことと同様に、兄の問題を長引かせてしまう結果となった。

＜療育過程における働きかけと本児の変化について＞

本児に対する働きかけは、インテイクにおける家および保育園での行動の様子、発達検査の結果、セッションにおける行動から家族、他児との遊びと課題を行うことを中心に、模倣行為を広げること、粗大運動で身体を十分に使う、微細運動を行う、言葉の量を増やすことを目標に行った。各期における主要目標は、第Ⅰ期では、模倣行為を広げることと身体を十分に使うこと。第Ⅱ期では、粗大運動で身体を十分に使うことと微細運動を行うこと。第Ⅲでは、言葉の量を増やすことであった。これらの取り組みに対する発達の变化は、言葉が多くなり、声が大きくなり、視線が合い、会話がうまくなり、理解力が出てくるという変化を迎えた。また、変化の広がりについては、まず、家庭であり、その後、本児にとって気に入っている場所になっていった。保育園は本児にとって生活時間が長いところであるにもかかわらず、最後となった。保育園は、本児にとっては自分に目を向けてくれる人が最も少ない所であったようだ。家族だけではなく、本児の参加する集団（保育園、近所の友達との遊び集団等）を直接観察し、介入することが必要であった。

これらの変化を生んだ理由を考えると、第一に、本児が人と遊ぶことが好きで、自分から対人関係を持っていたこと。第二に、提示された課題が本児に適

していたこと。第三に、本児の遊びや課題に家族が積極的に参加してくれたことが挙げられよう。セラピストはその子の状況や家族にあった遊びや課題を提示できる力量が必要である。

また、これらの変化によって、家族は本児に対するより良い働きかけ方を具体的に学習し、安心感を持ち、より積極的に関わるようになった。そして、本児の発達の変化→家族の安定→家族の積極的関わりという良循環を生んだと考えられる。そのことは、絵の中に全ての家族構成員が書かれていることから理解できる。

本児の発達の変化と家族の機能性を高めるための働きかけとの関係では、前述したように、どちらが先というのではなく、相互作用的に考える必要がある。家族の機能性が高まっても、何等、本児に発達の変化が見いだせなければ、そのことが逆に家族の機能性を崩して行くという悪循環を生んでしまうことになる。家族の機能性を高め、維持して行くためにも、本児の発達の変化を引き出すことが必要なのである。そこには、最重度の障害児であろうとも、発達するという障害児親をセラピスト自身が持つと共に、親に提示できることが大切である。

5. まとめ

本症例の療育の報告は家族療法的アプローチとして

のファミリーケースワークである。家族療法的アプローチによって、二次障害としての情緒障害を生むことなく、発達障害に対する治療教育をより良く行うことができた。その際、夫婦連合を促し、父親の参加による母親の過重な負担を軽減すること。そして、兄弟に対しても親として十分配慮することが必要であると言える。家族が機能的になり、父親が参加してくれるようになると、本児の変化も顕著になってきた。家族の機能性を図ることと発達を促すことは、段階論ではなく、同時平行的に行われることが重要である。

引用文献

- 1) Salvador Minuchin, Families and Family Therapy, Tavistock Publications (London 1974) サリヴァドール・ミニューチン、山根常男監訳「家族と家族療法」誠信書房、1983、P 4
- 2) Judith Lask & Bryan Lask, Child Psychiatry and Social Work, Tavistock Publications (London and New York 1981) J. ラスク、B. ラスク、門眞一郎、南陽子訳「子供と家族への精神医学的アプローチ」ルガール社、1988、P 130
- 3) J.M. Lewis, W.R. Beavers, etc, No Single Thread - Psychological Health in Family systems, brunner/Mazel (New York 1976) J. M. ルイス他、本多裕他訳「織りなす綾—家族システムの健康と病理」国際医書出版、1979、P 213~227
- 4) 谷口政隆、「心身障害児を取り巻く生活」、宮下俊彦他編著『障害児保育の基礎』医歯薬出版、1981、P 25